

江戸・明治期の 越後平野西部テリトリーオに関する研究

齋藤 浩志郎¹・福井 恒明²

¹学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail:koshiro.saito.6j@stu.hosei.ac.jp)

²正会員 博士(工) 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail:fukui@jsce.ac.jp)

新潟県越後平野には潟と呼ばれる湖沼が複数存在する。かつては現在よりも多くの潟が存在しており、これらは干拓によって消滅してきた歴史を持っている。近年では現存する潟の環境的な価値が見直され、人びとの潟との関わり方の再構築が求められている。都市研究の分野では、都市とその周辺を一体のものとしてとらえ、水系による物質循環や自然環境や資源を活用した産業、地域の共同体における社会や経済活動とそれによって生まれる文化を一体的に捉える概念であるテリトリーオ (territorio) が注目されている。本研究は越後平野のうち地理的に多様な西部を対象とし、史料調査および地形・地質図をベースとした復元図の作成とそれらの情報の重ね合わせによって、潟の干拓以前の江戸期から明治期における社会経済や生業圏などの地域構造についてテリトリーオ概念を参照しながら再解釈した。

キーワード: 越後平野, 潟, テリトリーオ, 地域構造

1. はじめに

(1) 研究の背景・既往研究

a) 越後平野の潟を取り巻く変化

新潟県下越地方の越後平野には“潟”と呼ばれる湖沼が新潟市とその周辺に17か所存在している。潟は河川の氾濫にともなう土砂の堆積、平野の沈降、海面の上昇・下降などのさまざまな現象によってつくり出され¹⁾、特有の風景を生み出している。かつては約120もの潟があり、稲作、狩猟、採集等の人的介入と生物や植物の活動が潟とその周辺の生態系のバランスが成立させていた。このように人びとは潟と密接した生活を営んでいたが、江戸期の新田開発を目的とした干拓が始まって以来、潟の数は減少の一途を辿った。特に昭和期以降、低湿地に起因する排水問題等の解決のための水田の土地改良や潟干拓事業が本格的に進行したことにより²⁾、潟と人びとの結びつきが希薄化した。

しかし近年、新潟市らしさを活かしたまちづくりや都市再生を目指す過程において、潟の存在が強く意識されるようになっていく。一例としては福島潟(新潟市北区)における観光・交流施設“ビュー福島潟”の開館(1997(平成9)年)や、市内の各潟とその周辺にて芸術作品の展示やワークショップを行う“水と土の芸術祭”の開催(2009(平成21)年、ほか)などが挙

げられる。さらに干拓を免れた潟のうち、佐潟(新潟市西区)が水鳥の生息地として国際的にみても重要な資源であると評価され、1996(平成8)年にラムサール条約湿地に登録されたことにより³⁾、湿地の資源の持続可能な利用を目指す動きも見られる。このように市民の潟への関心が徐々に戻ってきていることを受け、これから再び潟のある環境と人の営みとの良好な関係を構築していかなければならない。そのためには越後平野の持つ特性を多面的に捉えるとともに、そこでかつて築かれてきた本来的な地域構造や社会経済の関係性を再解釈することが求められている。

越後平野を対象とした研究は、地理学、歴史学、社会学、農業経済学など多分野において豊富な蓄積がある。佐々木(1961)⁴⁾の研究では、越後平野の水田単作地帯に着目し、土地改良や農業水利事業、営農形態の変化によって集落の立地形態にも変化が生じ、結果的に農業景観も変容したという経緯を明らかにしており、農業と集落の結びつきが地域の景観に大きく関係していることを理解できる。太田(2015)⁵⁾は佐潟を重点的に取り上げ、潟での生業によって魚類、鳥類、蓮根などの食料が確保され周辺集落の生計に繋がったことを明らかにしている。また佐潟に隣接する赤塚集落は、地形上有利であったことから交通の要衝・宿場町として繁栄したことを古文書や古絵図を用いながら示すと

ともに、越後平野を訪れた文人墨客たちが潟について触れた俳句や絵画を残していることを紹介しながら、この地において潟は重要な資源として位置づけられてきたということを明らかにしている。これらの研究は生業、交通、文化などさまざまな側面を切り口としながら、越後平野の地域構造について論じている。その中でも潟をはじめとする水系は、越後平野の生態系の維持サイクルや定住した人びとの興隆に深く関係していたことを理解できる。

b) 都市研究におけるテリトリーオ概念への注目

近年、地域構造を新たな視点から捉え直すための手法として“テリトリーオ (*territorio*) ”の概念を導入する動きが見られる。テリトリーオとはイタリア語で「地域」を意味しており、都市とその後背地である周辺の農村や自然環境まで包括的に着目し、特に気候風土に由来する個性ある共同体や経済圏とそれらの重なりによってその範囲が決定される⁹⁾。

イタリアでは都市化・工業化が進行したことにより、都市と農村との間で築き上げてきた特徴ある経済、産業、文化が失われた。それを受け、1970年ころより都市の街区構成や建築物のみに焦点が当てられていた都市研究に代わって、テリトリーオの概念をベースとした研究が蓄積されていった。特にヴェネツィア地方を対象とした研究では潟湖が多く資源に乏しい一方、舟運ネットワークや水力を活用した産業の広がりによって都市が発展してきたことを明らかにしており⁷⁾、かつての水辺の工場や農村の風景の価値が再評価されるとともにヴェネツィアの都市再生に活用されている⁸⁾。

日本においてもテリトリーオ概念を導入した研究が注目されている。樋渡⁹⁾は、江戸期を中心とした瀬戸内海沿岸に注目し、瀬戸内航路を介して複雑な物流網、文化の伝播ルート、港町間の人の流れが生まれ、巨大な社会経済圏が存在していたことを明らかにしながら、“瀬戸内テリトリーオ”の再構築を提唱している。

このようにテリトリーオ概念を用いて都市を多面的に捉えることは、今までの都市研究では浮かび上がりづらかった地域構造を見ることに有効であるほか、都市の将来像について議論する際の重要な情報にもなりうる。

(2) 研究の位置付け・目的

以上を踏まえ、本研究では都市と周辺領域を包括的に捉えるテリトリーオ概念を参照しながら、地形・地質や潟や河川等の水系といった自然条件と、潟を取り巻く人びとの生業圏やそれに伴う定住の進出領域、水系に対する人為的介入の範囲、および交通網の形成に

よる文化・経済圏の各要素の相互関係性、ならびに越後平野西部で構築されてきた地域構造を明らかにすることを目的とする。

2. 対象地・調査年代

(1) 対象地・調査年代の選定

本研究では、広大な越後平野の中でも起伏のある丘陵や山岳、砂丘地帯、複数の河川を有し、さまざまな自然環境を網羅的に見ることが可能な越後平野西部（旧西蒲原郡、弥彦村、燕市など）を中心に着目する。また潟に特徴づけられる地域構造を見るための史料調査が十分可能な年代として、江戸～明治期（一部昭和初期まで含む）を調査対象とした。

(2) 対象地の概要

越後平野は南北約100km、東西約10～20kmに広がる細長い平野である。平野中心部に位置する新潟市中央区には、南部より流下してきた信濃川が注いでおり、その左岸側が主に越後平野西部と呼ばれている。本研究ではこの越後平野西部を中心的に扱う。

対象地のほとんどは平野部が占めるが、海岸に近い地区には弥彦山、角田山等の山地や広大な砂丘地帯があり、特徴的な地形を持っていると言える。越後平野西部は南北で高低差があり、特に北側は海拔ゼロメートル地帯も多く存在していることから水が溜まりやすく、干拓が本格的に進行する昭和時代（戦後）までは多数の潟があった¹⁰⁾。よってここら一帯は長期にわたって河川と海面の水位差に起因する排水問題を抱えており、江戸時代にはすでに人工水路の開削および既存河川との立体交差工事、囲い土手の築堤、遊水池の取り決めなどによって対策が行われていた¹¹⁾。

対象地には信濃川より分流した中ノ口川や西川等の河川も流れており、江戸時代には年貢米などの物資の大量輸送のための舟運の航路として利用されていた¹²⁾。

3. 研究手法

本研究では、越後平野の持つさまざまな要素を見ていくため、①潟を含む水域や水系、②成立した集落とその位置、③江戸～明治期の主要な交通網（街道、舟運）、④潟での生業圏の広がり、⑤各藩の領域（藩領）、の5つの側面から調査を行う。調査方法は、地域のあらましを通史的に見ていくことができる市史・町史を主な対象とした文献調査、および当時の状況を読

み取ることが可能な絵図・古文書（インターネット上で公開されているデジタル保存史料を含む）を対象とした歴史史料調査を行い、各調査結果を地理情報システム（GIS）を用いて地図上に表現し、フィーチャークラスの作成によって情報を集約させる。そして作成したフィーチャークラスを複数重ね合わせることによって、単一では見ることができなかった地域構造の特徴について考察を行う。文献・歴史史料調査に用いたものを表-1および表-2に示す。地理情報システム（GIS）での作業はArcGIS for Desktop（ESRI社）を使用した。

4. 調査結果

(1) ベース図の作成

まず調査内容を記入していくためのベース図を作成する。国土交通省基盤地図情報 数値標高モデル標高（5mメッシュDEMデータ）や20万分の1土地分類基本調査 地形分類図のGISデータ（国土交通省GISホームページにて公開）を用いて「地形・地質図」を作成し、これをベース図とした。

(2) 水系に関する調査

本来、水域の把握には地形や河川、構造物などの情報が精密に表現された地形図を用いるのが望ましい。しかし、入手できる最古の地形図は1911（明治44）年のものであり、江戸時代の水域を把握することができない。そこで、江戸～明治期の古絵図で描かれている水域表現をもとに、前述の地形図で確認できる河川や潟、河道跡の表現との照らし合わせを行い、描写内容が一致すると判断できた部分をトレースし、江戸～明治期の水域を推定した復元図を作成する。

さらに史料・文献より用排水に関する集落内外の取決めや囲い土手などに関する情報を収集し、復元図上にプロットし、「水系図」としてまとめた（図-1）。

用水取得に関する取り決め（用水秩序）は、河川上流側（南側）で局所的に見られる。これらは主に山地や自然堤防など、周囲の平野部より高い位置を中心に設定されており、生業や生活のための用水を得るには工夫が必要であったことがわかる。一方、排水に関する取り決め（排水秩序）は、河川下流側（北側）の特に河川に沿った方向に広がっている。これらは潟や極度に標高が低い地帯に隣接するところに設定されており、各所において排水方向を詳細に決めていたことがわかる。

表-1 調査に使用した主な文献の一覧

文献名	編者・発行者	発行年
新潟市史 通史編1 原始古代中世・近世（上）	新潟市史編さん原始古代中世史部会 新潟市史編さん近世史部会	1995（平成7）年
新潟市史 通史編2 近世（下）	新潟市史編さん近世史部会	1997（平成9）年
新潟市史 通史編3 近代（上）	新潟市史編さん近代史部会	1996（平成8）年
黒埼町史 通史編	黒埼町	2000（平成12）年
巻町史 通史編 上	巻町	1994（平成6）年
巻町史 通史編 下	巻町	1994（平成6）年
吉田町史 通史編 上巻	吉田町	2003（平成15）年
西蒲原土地改良区 上巻	西蒲原土地改良区	1951（昭和26）年
2014（平成26）年度～2016（平成28）年度 新潟市潟環境研究所活動報告書	新潟市環境政策課	2017（平成29）年
越後平野における新たな地域学 みんなの潟学	新潟市潟環境研究所	2018（平成30）年

表-2 調査に使用した主な歴史史料の一覧

史料・資料名	発行者	作成年・発行年	備考
正保二年越後絵図（公儀御国絵図巻34）	-	1645（正保2）年作成	新潟県立図書館／公文書館 越後佐渡デジタルライブラリー ^{13）} 上で閲覧。
天保国絵図 越後国（新発田村上領）	-	1838（天保9）年作成	国立公文書館デジタルアーカイブ ^{14）} 上で閲覧。
天保郷帳 越後国郷帳下（新発田村上領）	-	1834（天保5）年作成	
新潟市史 資料編4 近世（Ⅲ）	新潟市史編さん 近世史部会	1993（平成5）年発行	-
巻町史 資料編3 近世（Ⅱ）	巻町	1990（平成2）年発行	-
新潟市合併町村の歴史 史料編1 関屋村・坂井輪村・内野町・中野小屋村・赤塚村・三潟の開発	新潟市合併 町村史編集室	1982（昭和57）年発行	-

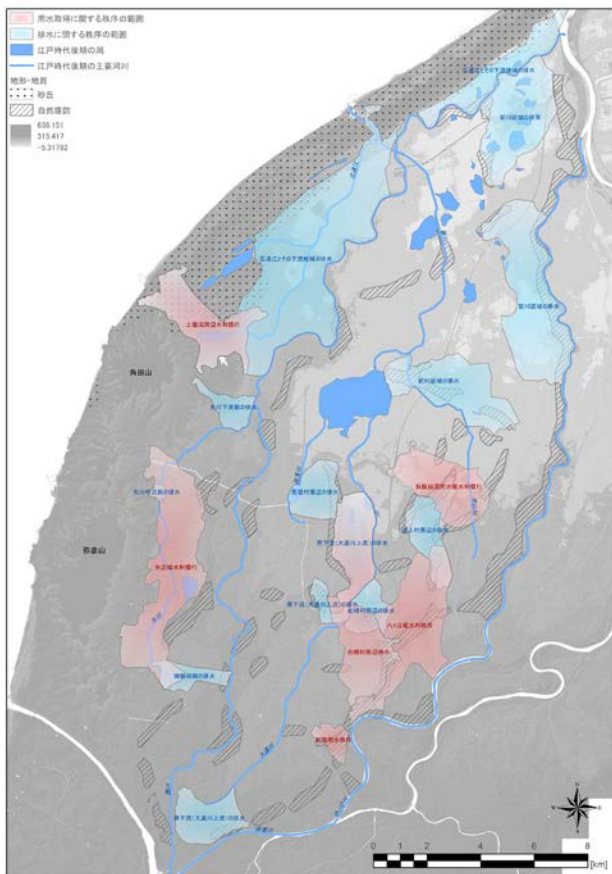


図-1 越後平野西部の水域と用排水に関する取り決め範囲 (江戸期)

(3) 集落に関する調査と位置の推定

集落については江戸期に作成された国絵図を主な対象として情報を収集した。国絵図とは諸藩の主要大名が幕府より郷帳(石高帳)とともに提出を命じられていた資料であり¹⁵⁾、江戸期のうち4年代で各集落の石高と大まかな位置関係を地図的表現によって絵図にまとめられている。越後平野含む越後国絵図では正保期(1644年～)、天保期(1839年～)が閲覧可能である(図-2)。これにより当時成立していた集落を確認することができるが、位置関係はデフォルメされているため、正しく空



図-2 調査に使用した国絵図の一例(1838(天保9)年作成『天保国絵図越後国(新発田村上領)』の一部)¹⁶⁾

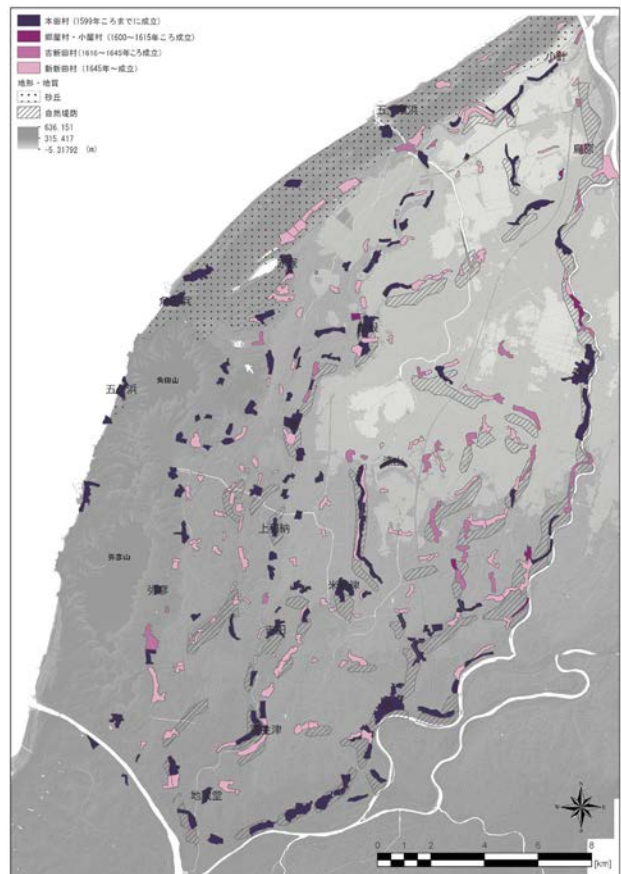


図-3 越後平野西部の集落位置推定図(江戸～明治期)

間構造を把握できない。そこで前述の水域と同様に、1911(明治44)年地形図上の集落表現をトレースすることで、集落位置を推定した復元図を作成する(図-3)。

越後平野西部の集落のうち、江戸時代成立時で存在していた集落は「本田村(1600年ころまでに成立)」, 牧野忠成氏の長岡藩入封(1616(元和2)年)による新しい支配体制が始まるまでに成立した村は「郷屋・小屋村(1600～1615年ころに成立)」と呼ばれており¹⁷⁾、特に後者は集落の名称が〇〇郷屋・〇〇小屋のようになることから判別が容易である。そこで牧野氏入封時に行われた検知の記録が残されている「御知行目録」(1618(元和4年)発行)に記載されていた村々をもとに本田村と郷屋・小屋村の分類を行った。さらにそれ以降の新田開発に伴って成立した新田村について、1645(正保2)年発行の国絵図で増加している集落を「古新田村(1616～1645年ころに成立)」, 1838(天保9)年発行の国絵図で増加している集落を「新新田村(1645年以降成立)」とし、それぞれ色分けを行った。

図-3より、本田村は複数の隣接しながら自然堤防に沿って線状に広がっているものが多い。新田村はその本田村の延長線上に伸びて成立したものもある一方、特に北側の低地において、それまで集落がなかったところに新しく成立している集落もある。

(4) 交通（街道・舟運）に関する調査

街道や舟運の航路についても同様に国絵図で描かれている内容を中心に調査したほか、史料および文献より当時の交通事情や関係集落に関する情報を収集し、1911（明治44）年地形図の描写内容をもとに位置を推定し、交通（街道・舟運）に関する図を作成した（図-4）。

長岡藩のうち越後平野に位置する集落は巻組・曾根組（合わせて蒲原両組）としてまとめられ、各組の郷藏に年貢米が集約されていた¹⁹⁾。年貢米は取引が行われる下流側の新潟中心部までは蒲原舟道（新潟舟道、西川舟道とも称された）と呼ばれる舟運業者の株仲間が独占して川下げしており、これが藩政と深い関係をもった連続的な生業圏を生み出していた。

図-4より、このあたり一帯の舟運は特に西川・大通川が集中して担っていたことがわかる。また街道および主要道は河川に平行して伸びているものや自然堤防上に沿ったものが多い一方、山地を抜ける街道も見られ、地形条件に合わせて展開していたことがわかる。

(5) 潟での生業圏に関する調査

集落が特定の潟を利用していたことが史料・文献からわかるものについて生業圏として地図上に表現した（図-5）。

三潟（鎧潟、田潟、大潟）の周辺の集落群のうち、長岡藩から採草権や漁猟権を認められていたのは「潟組」とよばれており¹⁹⁾、藩政区分を超えた生業の一体的な生業圏が存在した。潟組は三潟の開発にも関わっており、新田開発をさらに進めていったことで現在の越後平野の穀倉地帯としての基盤を固めた。この潟での生業圏に関する記録は主に中流部を中心に多く残されており、特に江戸時代後期あたりからはより低地側（北側）へ生業圏が拡大していることがわかる。

(6) 藩領に関する調査

江戸時代の越後平野西部は長岡藩と新発田藩による支配から始まったが、領地の分譲、用排水の利権や土地の獲得をめぐるやり取り、幕府による領地替えが頻繁に行われ、藩領が複雑に入り組んでいた。その大まかな区分けを概観するために、各集落がどの藩に属していたのかを読み取ることができる国絵図を対象に調査した。さらに江戸時代では水系や派生関係のまとまりによって“御蔵組”と呼ばれる年貢米の集約範囲が決められており²⁰⁾、各集落の石高が記載されている郷帳から御蔵組の構成について調査した。その結果を図-3の集落に関する図をベースに藩領に関する図としてまとめた（図-6）。

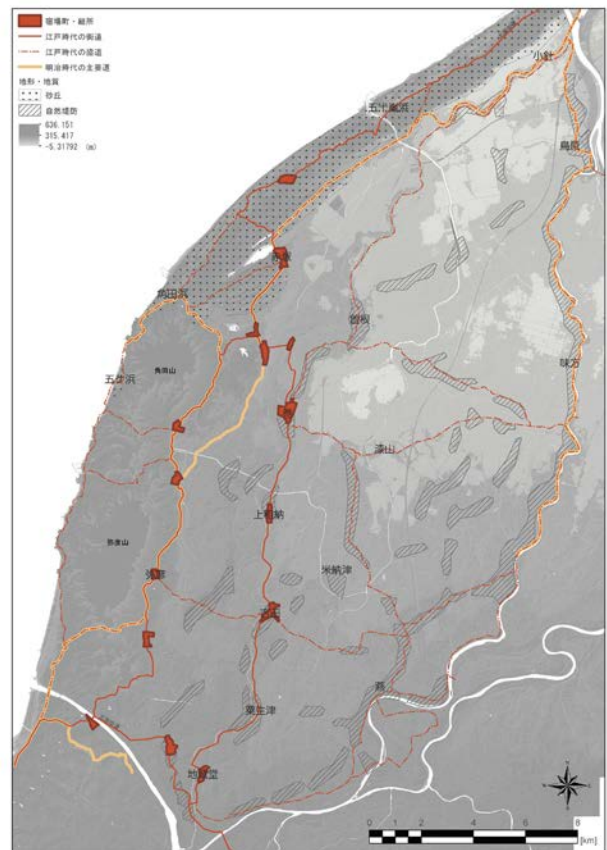


図-4 越後平野西部の交通網（街道・舟運）
（江戸中期～明治期）

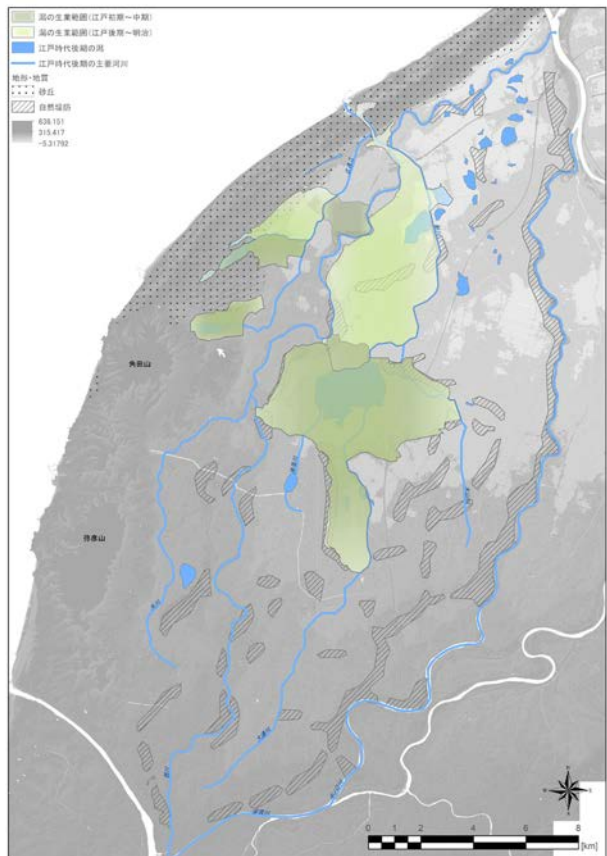


図-5 潟を利用した生業圏に関する図
（江戸初期～明治期）

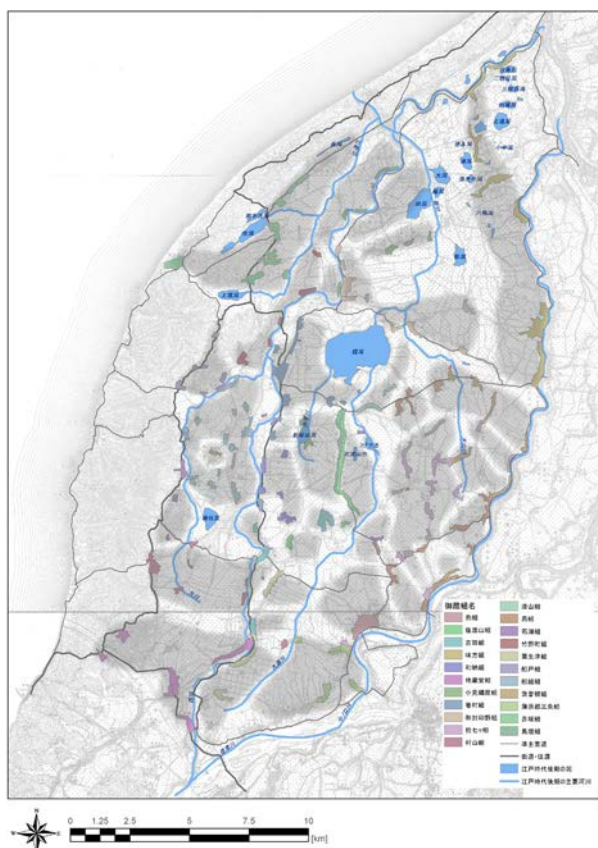


図-6 藩領と御蔵組の区分け

5. 分析・考察

本章では、3.での調査を踏まえ、江戸時代初期～中期と江戸時代中期～明治時代の2年代で作成した地図の重ね合わせを行い、越後平野西部の地域構造について考察する。

(1) 江戸時代初期～中期

江戸時代初期～中期の水系図、集落位置推定図、交通網および潟を利用した生業圏の重ね合わせにより江戸時代初期～中期の越後平野西部の状況を図-7に示す。集落は立地場所の地形や水系との関係などから4種に分類できる。

a) 山麓に沿った集落

角田山・弥彦山の山麓に沿って南北に集落が分布している。山麓では山からの水源が利用できることから、居住地として適した扇状地に人びとが定住していったことが考えられる。また集落間には用水取得に関する用水秩序が存在している。これは各集落の耕作地として利用できるのが矢川の右岸側であり、山の水源が利用できないことから、生活用水とは別に矢川や西川から用水路を引いたことによると考えられる。山裾に沿って流れる矢川は特に上下流の標高差が小さく、耕作

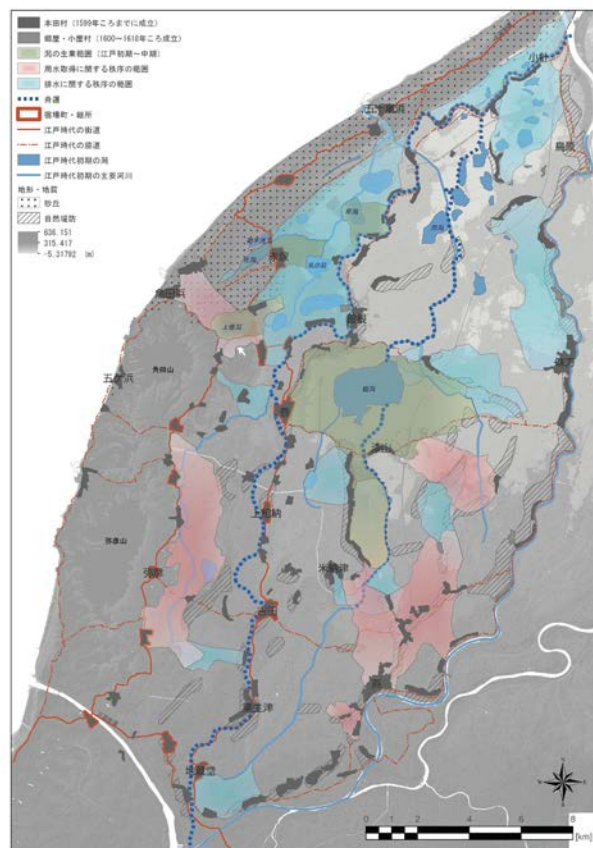


図-7 江戸時代初期～中期の越後平野西部の地域構造

(水系・集落・潟での生業範囲・交通の重ね合わせ図)

を行う際には水資源の合理的配分が必要になったことが考えられる。

b) 河川に沿った集落

河川に沿った集落の位置は断続的な自然堤防と一致しており、居住地として適した微高地上にある。この場所は西川や中ノ口川から農業用水を確保しやすかったことから、江戸時代初期の時点で多くの集落が成立していたと考えられる。また中流から下流側にかけて、高低差のある集落間では排水に関係する取決め範囲が定められており、南北の地域で水系を巡った課題は異なっていたといえる。西川沿いの集落では、舟運の航路や街道と並行しており、収穫した農作物を新潟方面へ運搬しやすい環境が整っていたことが伺える。宿場町・継所の中には、東西方向へつなぐ主要道との結節点にもなっている村もあり、物流・人流ともに交通の要衝として大規模な集落を形成していたことが考えられる。

c) 旧河道の自然堤防上の集落

河川から離れた地帯には旧河道の自然堤防があり、居住地として適する微高地上に形成された集落がある。これらの中には、上流側の河川に沿った集落との間で用水取得に関する秩序を定めている集落もあり、農業に必要

な用水確保を行っていたとみられる。また鵜潟に近い集落では潟での生業圏とも重なっており、漁業や狩猟も行うなど複合的な生業を行っていたと考えられる。江戸時代中期までのこのタイプの集落は、潟の上流側で集中して形成しており、潟への排水が行いやすい箇所から人びとの生活圏が形成されていったことが考えられる。

d) 海岸の集落

海岸集落は南側では山麓、北側では砂丘地上に形成されている。漁業と製塩業を営むことで内陸部の集落とは独立した生業圏を形成していた。各集落間は街道や主要道によって結ばれており、南北方向が主な移動経路であったことが考えられる。角田浜は山麓部と砂丘地の境目付近に位置し、山の水源や上堰潟の貯水の利用を巡った、用水取得に関する秩序が存在していた。また北側の砂丘上には宿場町・継所として指定されている村もある。このように海岸集落の中でも地形の違いによって生業圏に形成に差が生まれていたと考えられる。

このように地形や水系などを重ね合わせることで集落の特性や分布から地域構造を把握できる。

(2) 江戸時代中期～明治時代

江戸時代水系図、集落位置推定図、交通網および潟を利用した生業圏重ね合わせによる江戸時代後期～明治時代の越後平野西部の状況を図-8に示す。この時期までに起こった変化として、2点が挙げられる。

a) 形成集落の立地の変化

早通川沿岸および大潟周辺の自然堤防上には新たに集落が連続して形成されている。これは新川の開削によって低地帯水域の排水が進行し、それまで農業の展開が難しかった地帯において新たに新田開発が可能になり、居住地として適した微高地である自然堤防に進出していったことが考えられる。

また、海岸側の砂丘地帯にも新たに集落が形成されている。これもやはり新川開削によって広通江の排水機能が確保され、農業の展開が可能になったことで、居住地として適した微高地である砂丘上に定住したことが考えられる。

b) 潟での生業圏の拡大

新川は大潟・田潟から海側へ開削されている。これによって海岸集落（浜村）の五十嵐浜は舟運によって内陸の潟周辺へ廻りやすくなったことが考えられる。漁業・製塩業を生業として独立していた浜村が潟での生業に進出することが可能になり、生業圏を拡大していったことが考えられる。

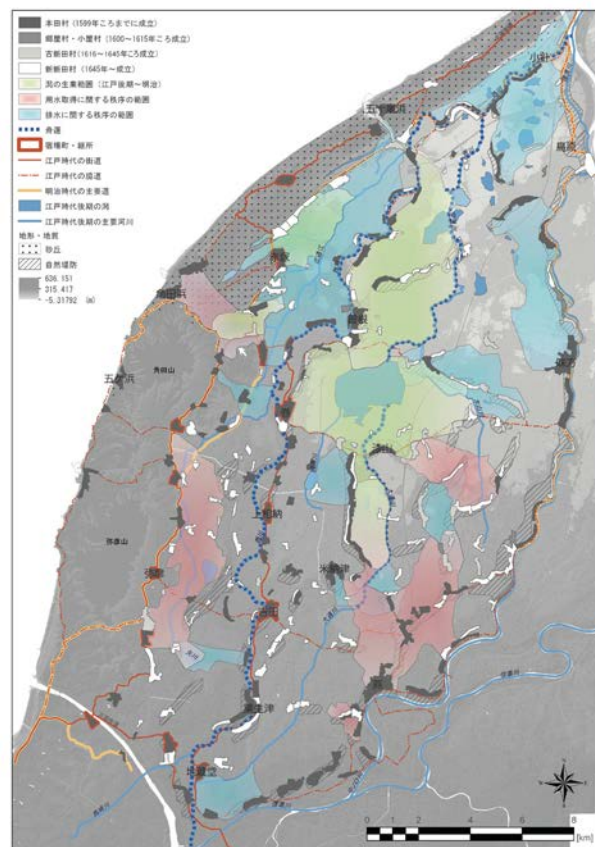


図-8 江戸時代後期～明治期の越後平野西部の地域構造
(水系・集落・潟での生業範囲・交通の重ね合わせ図)

また潟の生業圏は西川沿岸の集落や下流側の集落にまで拡大している。各集落から田につながる水路を利用し、舟運によって潟まで出ていたことが考えられる。このように水系の変化によって、南北に広い範囲で新たな生業圏を生み出し、共通の生業の場を持つようになったことで、それまでよりも集落間の関係性が深まっていったといえる。

(3) 越後平野西部テリトリーオの特徴

越後平野西部をテリトリーオとして捉える際、その基礎となる共同体は各地に点在する集落であり、潟や河川を利用する生業が可能な範囲に隣接するという秩序にしたがって、自然堤防や砂丘などの微高地上に分布していた。排水・治水事業が進んだことで、低地帯水域においても生計の要となる新田の開発が進行し、人びとの定住可能範囲が拡大し、集落は全域に展開した。

この地域で共同体が果たしていた役割はおもに2点ある。ひとつは、水系操作による用排水の整合性の維持である。新たに形成した集落を含め、周辺の関係集落間で信頼関係を構築していき、町村レベルでその範囲を広げていったと見られる。二つ目は経済圏の形成である。これら全体が、微高地に合わせて南北に伸びる

街道、および西川を軸に周囲の水域と接続していた舟運による交通網によって人流や物流が生み出され、経済圏を構成していた。

以上より、地形・地質を活かして形成した各共同体が、生業に対応した水系操作と交通網による経済圏の発展によって繋がれていったことがわかる。このように、共同体の役割による影響範囲が重層的に展開されていることから、越後平野西部全体がひとつのテリトリーであったと考える。

6. まとめ

(1) 結論

- ① 地形・地質や水系、交通網など、複数の情報を地図上で重ね合わせることで越後平野西部では各要素が相互に影響をあたえ合いながら、特有の地域構造を築いていった経緯を明らかにした。
- ② 越後平野西部では江戸初期から中期には地形と水系に応じて集落が立地し、それぞれ生業圏を形成していた。新川の開削と囲い土手の構築による水系の変化によって低地帯での生業の場として潟の重要性が高まったことを示した。
- ③ 江戸後期以降、潟や河川の水域の利用や水系の操作が高度になると、その周辺で生業を行えることから人びとの定住可能範囲が広がり、結果として未利用の微高地などに集落が増加したことを示した。
- ④ 気候風土に由来する共同体が重層的に展開していたことを示しながら、越後平野西部をひとつのテリトリーとして捉える見方を示した。

(2) 今後の課題

本研究では触れることができなかった、神社仏閣をはじめとする信仰・宗教や、他地方からの移住者・訪問者による文化の伝播経路および範囲にも注目することによって、生業圏や人々の進出範囲の変化との関係性の考察をさらに深めることができると考える。

また本研究の対象である越後平野西部とは人口規模や取り巻く水系の状況が異なる、越後平野北部や南部などでも同様の研究を行うことにより、地形・地質や水系によって地域構造が変化しうることを明らかにする必要があると考える。

参考文献

- 1) 2014（平成26）年度～2016（平成28）年度 新潟市潟環境研究所活動報告書―潟と人との未来へのメッセージ―、新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究

所事務局, p3, 2017.

- 2) 前掲1), p.41.
- 3) 新潟市：第4期佐潟周辺自然環境保全計画, p.13, 2019.
- 4) 佐々木博：蒲原平野における農業集落景観の変遷, 地理学評論, 34巻12号, pp.650-662, 1961.
- 5) 太田和宏：新潟市西区に関する潟と人との共存（里潟）について～潟の歴史のかかわりについて（佐潟を中心として）～, 平成26年度新潟市潟環境研究所研究成果報告書, 新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務所, pp.65-90, 2015.
- 6) 日本建築学会：建築雑誌 特集・都市史から領域史へ, vol.130, No.1671, pp.5-6, 2015.
- 7) 陣内秀信, 高村雅彦：水都学I 特集：水都ヴェネツィアの再考察, 法政大学出版局, p.102, 2013.
- 8) 日本建築学会：建築雑誌 特集33・瀬戸内のテリトリーの再構築, vol.134, No.1724, p.6, 2019.
- 9) 樋渡彩：瀬戸内海における地域構造に関する歴史的考察, 一般社団法人 第一生命財団, pp.2-62, 2020.
- 10) 巻町：巻町史 通史編上巻, p.603, 1994.
- 11) 前掲8), pp.635-639.
- 12) 新潟市史編さん原始古代中世史部会, 近世史部会：新潟市史通史編 1 原始古代中世近代（上）, pp.14-18, 新潟市, 1995.
- 13) 新潟県立図書館・公文書館デジタルアーカイブ <https://opac.pref-lib.niigata-niigata.jp/darc/opac/search-detail.do?lang=ja>
- 14) 国立公文書館デジタルアーカイブ：<https://www.digital.archives.go.jp> [最終閲覧日：2021.1.5]
- 15) 喜多裕子：正保国絵図における支藩領記載について―周防・長門両国を事例に―, 歴史地理学 41-5(196), p.2, 1999.
- 16) 国立公文書館デジタルアーカイブ：天保国絵図越後国（新発田村上領）, https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/detail/detailArchives/0303000000_4/0000000262/00 [最終閲覧日：2021.1.5] .
- 17) 前掲10), p.423.
- 18) 前掲10), p.314.
- 19) 前掲10), pp.612-613.
- 20) 前掲10), pp.272-278.